韓国慶尚北道善山古墳群（Ⅰ）

― 慶州における横穴式石室墳の発生と その特質について（予察）―

伊　藤　秋　男

1. 問題の所在

いわゆる積石木槨墳と呼ばれる古墳構造は，慶州古墳[1]の特徴的要素のひとつであって，高塚古墳が慶州地方に[2]出現する初期，おそらく4世紀の後半あるいは5世紀前葉にはすでにかかる積石木槨墳が築造されていたことは事実である。他地域にほとんど類例のない，この特異な古墳構造は，[3]古墳時代第3期[4]の終末にあたる 600年頃まで高塚古墳の内槨として主体的にひきつがれてきた葬法である。このような伝統の中に第3期の中頃，おそくとも6世紀の中葉に新羅社会への仏教の伝来，[5]あるいは在野勢力の慶州門閥勢力への介入をその有力な歴史的契機として，全く新しい葬法が出現した。それがここで問題とする横穴式の石室墳である。

今日までに調査・報告された慶州古墳群の石室墳は， 133号墳（馬塚）， 137号墳（双床塚）， 145―1号墳（皇南洞破壊墳）第Ⅴ・Ⅵ槨， 151号墳，皇吾洞 102―34番地古墳，それにここで詳しく触れる 131号墳（路西里石室墳，あるいは牛塚），皇南洞味鄒王陵前A地区第2号墳・同C地区第9・10号墳（嶺南大学調査）・同第5区域第7・9・11・16・17・18・19・20号墳（釜山大学調査）[6]などの17余基である。しかし有光教一氏や小泉顕夫氏によると，大正15年（1925）に最大の瓢形墳である98号墳の周辺から約50基の石室墳が発見されたと伝え，[7]また1973年に行われた遺跡公園建設にともなう調査でも，さきの釜山大学や嶺南大学が発掘した古墳以外に，多数の石室墳が確認されているので，[8]慶州古墳群での石室墳は，これまでに考えられてきたほど珍しい墳墓形式ではないようである。

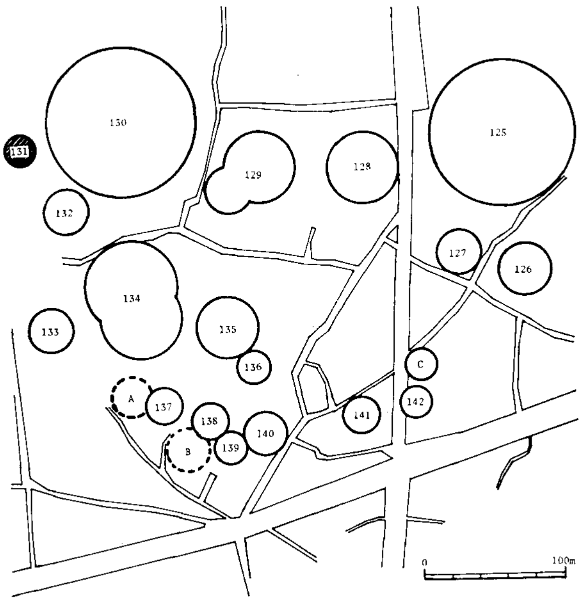
形式的には，さきの17余墳のうち 145―1号墳の第Ⅴ・Ⅵ槨，皇吾洞 102―34番地古墳や味鄒王陵地区諸墳が竪穴式古墳で， これが大半をしめ， 残りの4基が横穴式（ 131・133・137号）あるいは 羨道施設のない横口式（ 151号）の古墳である。大正15年発見の小石室墳の構造は詳かでないが，1973年に発掘された味鄒王陵地区の諸石室墳が竪穴式であることや，金製嵌玉宝剣が出土した鶏林路の小石室墳も同じく竪穴式古墳らしく思われることから，皇南洞のかずかずの積石木槨墳の間隙をぬって分布していた，あるいはまだ所在するところの小石室墳の多くは竪穴式の古墳に属するものと推測される。これまでにのべてきた石室の諸構造は百済地区の漢江や錦江流域，それに洛東江流域に広く見られるもので，決して慶州特有の形式ではない。しかし慶州の石室墳を編年的に観察してみると

き，石室墳出現の様相にきわめて強い地域性がみられることは，特に注意を要する点である。

すなわちその地域性とは，慶州の石室墳が他地域と比べてはるかに遅れて出現することである。百済古墳の指標的形式とみなされる横穴式古墳は，半島西海岸地方，とくに漢江や錦江流域に卓越し，公州では宋山里１・２・５号墳[9]にみられるように５世紀後葉（第２期）にはすでに築造されている。[10]一方，洛東江流域は竪穴式古墳が伝統的に築成された地方で，第１期の４世紀末あるいは５世紀の前葉（高霊池山洞３号墳，釜山五倫台９・10号墳など[11]）から，第３期の６世紀の中葉頃（咸陽上柏里古墳，大邱達西50号墳第２槨[12]）まで竪穴式古墳の伝統を追うことができる。これとならんで第２期初期の５世紀中葉には，伝統的な竪穴式古墳に百済地方の横穴式古墳の流れをくんで成立したと言われる[13]羨道施設のない横口式古墳や，百済式の本来的な横穴式石室墳が第３期の中葉（６世紀の中頃）から出現し，第４期の終末（７世紀の後半）までつづいている。このように百済や洛東江の流域では高塚古墳の出現と同時に早くから横穴および竪穴式の石室墳が築成されているのである。

ところが慶州地方に形式はどうであれ，とにかく石室墳が築成されるのは，６世紀初葉から中葉にかけての時期であり，味鄒王陵地区第５区域第17号墳（竪穴式）や羨道施設のない横口式古墳である慶州 151号墳などが，今日のところ慶州地方に所在する古式石室墳のひとつと考えられる。[14]とくに 151号墳という新式古墳の出現は，洛東江流域の横口式古墳が墳墓形式のひとつとして慶州墓制に受容されたことをよく物語っている。これは新羅社会へ仏教が伝入し，かつ定着したためか，あるいは洛東江流域における在野勢力が慶州門閥勢力のなかにその地保を得て，漸次浸透したという歴史限定的な意味をもつ現象として理解できよう。小泉顕夫氏らによって，大正15年に調査された数十基の小石室墳や1973年遺蹟公園建設にともなって検出された石室墳のほとんども同様に６世紀以後の所産と考えてよいであろう。[15]そして第３期の終末にあたるほぼ６世紀末葉にはじめて片袖式の羨道のある横穴式石室墳の普門洞夫婦塚（婦塚）[16]が慶州市街地東方の丘陵斜面に築成され，これは羨道施設のある石室墳としては，慶州地方最古の横穴式石室墳である。[17]このような横穴式古墳とならんで，第４期の中頃（７世紀の中葉頃）には，玄室のプランが正方形あるいは長方形で，かつ片袖または両袖式の羨道とそれにドーム状の天井を有する特殊な古墳が出現する。この形式の古墳が，慶州地方の典型的な終末期古墳のひとつと考えられる。

慶州古墳群でこの特殊な形式に属する古墳には，今日知られているものとして，路西洞 131号・ 133号・ 137号の３基がある。注意すべきはその占地の様態である。これらは路西洞地区の慶州古墳群の西辺を界するかのように分布し（第１図），しかも慶州市街地がのる微高地が低地（水田）に接する，その縁辺にほぼ１列をなして所在するという，きわめて特異な立地を示している。この路西・路東洞の地域には，単墳としては最大の鳳凰台古墳をはじめ飾履塚・金鈴塚・金冠塚・瑞鳳塚・壺杅塚などの王侯貴族墓が集中し，天



第１図　慶州路西・路東洞地区古墳分布図

馬塚や98号墳のある皇南洞の北部地域とともに別格の墓域を形成していたことが推定される。現在なおこの領域が「都蔵骨」と呼称され，聖なる地域として通念化していることも，これをよく物語っている事実である。[18]ここでのべた石室墳が，このような特殊な墓域のより中心部，すなわち金冠塚，金鈴塚や瑞鳳塚などに接して築造されることなく，ことさらに墓域の縁辺に占地することにはきわめて重大な理由があるように思われる。すなわちこのような石室墳の被葬者には，墳墓をその中央部に営造せしめない強い社会的制約が介在したことによる結果ではなかろうか。

注意すべきもうひとつの点は，このような特殊な構造をもつ石室墳は慶州古墳群においては数基にもみたない数少い古墳であるうえ，これらの古墳の築成を最後に事実上慶州古墳の営造ならびにこれと不可分の関係にある墓域の拡大が完全に終焉することである。この後は慶州市街地をとりかこむ山々の低山腹面へと墓域が移動し，路西洞の西方約 1.5km のところの忠孝洞へ，そしてやや時代が下ってその南方の西岳洞，あるいは市街地の東南にあたる普門洞（部落内にある古墳群）地区へと墓域が選地されていく。しかも今日まで調査された古墳から判断して，これらの新しい墓域に占地した古墳のほとんどが，その内部主体として慶州路西洞 131・ 133・ 137号の諸墳と同じく穹窿状の天井に羨道施設をもった石室墳であると推定される。

このように墓域の平地立地から山腹立地へと占地の様態が遷移すると同時に全く新式の石室墳が出現し，この構造が６世紀中葉から新羅統一期前後にかけて慶州地方古墳の内部構造として定式化してくることは興味ある事実である。くわえて見のがせないことは，これまで王位を継承してきた最高の骨品である聖骨が絶え，真骨で初めて王位についた太宗武烈王（ 654― 660）の王陵が西岳洞に所在することである。この武烈王陵こそ慶州市街地の南に所在する墓域（慶州古墳群）の外に築成された最初の王陵である。何故に武烈王陵が伝統的な王陵墓域と考えられる路西・路東・皇南洞に選地されなかったのであろうか。このような現象は伝統的な王陵墓域に営造することにある種の社会的制約が課せられた結果とみなす立場にたつならば，その制約とは武烈王が最高の骨品である聖骨位でなく，そ

れより１ランク低い真骨位であったという身分上の問題に対する慶州門閥貴族のネガティーブな評価に基づいたものと考えられないであろうか。

たしかに中古代の新羅金氏王室は，金氏王族間できわめて標式的な族内婚が行われており，これが聖骨位に属する成員が激減した直接的原因と思われる。[19] この結果が１ランク下の真骨位にある太宗武烈王の王位継承という事件に顕現するわけであるが，それまでにも族内婚が必らずしも守られたとは思われない場合もないではない。例えば太宗武烈王の父竜春の母で真智王姫の知道夫人は聖骨位に属する成員ではないと考えざるを得ない。なぜならその子竜春の妻にあたる天明夫人は善徳女王と同腹の姉妹で聖骨位であり，もし知道夫人が聖骨位に所属する王姫であれば，その子竜春も当然聖骨位であり，また竜春の子である太宗武烈王も聖骨位の成員でなければならないからである。太宗武烈王が真骨位にとどまったのも父竜春の骨位に起因するもので，太宗武烈王の父母の婚姻関係も族外婚としての性格が強いと言えよう。くわえて太宗武烈王姫である文明夫人の父は任那金官系の王族でもある。このことは６世紀末から７世紀の前半にかけて慶州門閥貴族の婚姻関係，ひいては骨品制そのものに本質的な変移があったことを意味している。そして文明夫人の父舒玄が任那系王族の成員であった事実に象徴されているように，在野の豪族あるいは新附の王族のあるものが婚姻関係を通じて漸次，慶州門閥勢力下に吸収同化されていく契機が太宗武烈王代の前後から新羅統一期にかけて増大しつつあったのではなかろうか。さきにも触れた慶州路西洞 131号・133号・137号墳の被葬者は，その古墳占地の様態から推断して，このような背景のもとに慶州門閥勢力下に吸収された在野勢力のひとりとしてみなすことも，あながち荒唐無稽な推論として否定することができないように思われる。

玄室のプランがほぼ正方形で穹窿状天井と羨道施設をもつ横穴式石室墳に関して，もうひとつ注意すべきことがある。上に問題としてきた太宗武烈王陵では，その立地や墳丘の裾に自然石をある間隔をもって配列した，いわゆる腰石施設をもつ構造[20]から，おそらくこの種の石室が内部主体として構築されているものと推断して間違いないことである。おそらく武烈王陵が，このような内部構造をもつ最初の王陵でなかったかと思われる。ちかごろ月城郡内南面拝里に所在する神徳王陵と伝えられる古墳が調査されたが，同王陵も同じような内部構造をもつ古墳であることが確認された。[21] このことから慶州市内外に分布する他の17基の新羅王陵と伝えられる古墳のすべてが，その占地の様態と腰石や石欄を墳丘にめぐらすという外部施設にきわめて強い共通性がみられるため，伝神徳王陵と同形式の石室をその内部主体としてもつ古墳と考えてよいと思われる。この特殊な石室墳が，ほぼ７世紀の前葉にはじめて出現し，太宗武烈王陵にこの形式が採用されて以来，これまでの積石木槨墳という伝統的墓制にとって代って新羅王陵の墳墓形式として定式化されてくる事実は，王陵墓制の研究にとってきわめて重要な視点である。

上にのべた特殊な石室墳は，ソウル東方の蚕室地区[22]や公州宋山里[23]の各地に分布しているが，これらはすべて４・５世紀の百済漢城・熊津時代に属する古墳と考えられている。こ

れらが編年的にはなはだしく遅れて出現した慶州地方の同形式の石室墳と，特にその系譜についてどのような関係にあったかは，今後の研究として残された問題である。一方これと同じ構造の古墳で7世紀以後に築成されたものとしては，これまでにのべてきた慶州地方のそれを除くと，慶北高霊郡高霊面古衙二洞に所在する高霊古衙古墳[24]（高霊壁画古墳に北接する）と慶南金海郡右部面（旧地名）の王姫陵の東にある通称金海古墳[25]の2基が知られているにすぎない[26]。この数にみられる稀少性は，三国時代末から新羅統一期以後にかけて墳墓の造営行為がある特殊階層，たとえば在野の豪族とか高官に限定されたことに起因すると思われるが，この地方に伝統的な伽倻式古墳の自律的発展形式とは到底考えがたい，かかる石室墳を築成したのは，彼らが慶州の王陵として定式化した墳墓形式を踏襲した結果であり，このような断層的な墓制の変遷に新羅専制王権の確立の経緯が少なからず投影されているように思うのである。

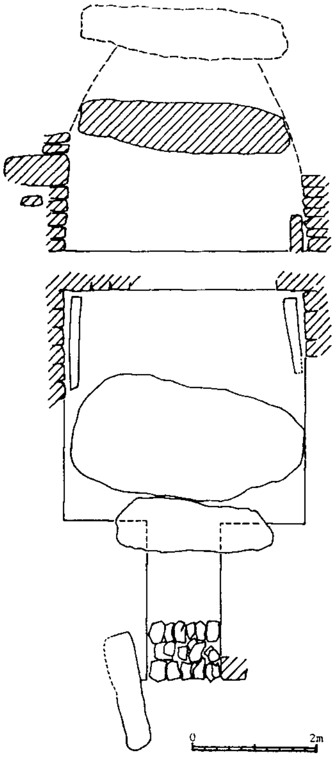
かかる特殊な古墳に対する，このような視角に立って行われた慶州 131号墳，および善山院洞地区古墳群の踏査の成果をここに報告することが，この小文の主たる目的である。

2. 慶州路西洞第131号墳

本墳（通称路西里石室墳または牛塚）が馬塚（路西洞第 133号墳）の石室構造とあまりにも似ていたため，かつて一部の学者によって，それらが同一の古墳であると過信されたことがあった[27]。そしてこれらがたがいに別個の古墳であることが判明した以後も依然として本墳の所在が明確になされず，今日に至っていた。

本墳は1929年（昭和4年）9月に梅原末治氏や小泉顕夫氏らによって調査された古墳で，同時に撮影された現場写真や略測図などが，今日梅原考古資料として東洋文庫に所蔵されている[28]。このうちの1枚，図版3－1には調査古墳を中心に，その上部には水田に密生する稲が撮影されており，これによって本墳が路西洞地区古墳群の西端に立地する古墳であることを推知することができた。1950年3月これを手掛りに該当地域を踏査してみると，路西洞 117番区の7，Hwan Chol Jun 氏宅の東に通路を隔てて石堆状をなす積石があり（図版1・2），この中に梅原考古資料にみられるものと同一の天井石と玄門上部に横架される楣石が，ほぼ原位置のまま存在することが確認された。さらに慶州古墳分布地籍略図にこの位置を求めた結果，本墳がまさに路西洞 131号墳そのものであることが明らかになったのである。

梅原考古資料2690によると，発掘当時はまだ高さ2m前後の墳丘が一部残存していたように思われる。壁体上半部の積石は，ことごとく崩壊し，直径 2.2×1.4m，厚さ約 0.4 mの円盤状の大天井石が玄室内に落下していることから，梅原氏の略測図（第2図）に示されているように，穹窿状の天井をもつ，きわめて特殊な石室墳であることに間違いない。そして玄室のプランは 3.8×3.95mでほぼ正方形に近く，長さ 2.6mの羨道がほぼ正南に開口し，くわえて壁面には漆喰が塗られていた（約6㎜）という石室構造は，本墳に近接



第２図　慶州路西洞第131号墳略測図（梅原考古資料5732による）

する馬塚や双床塚（路西洞第 133・ 137号墳）と全く類型的なのである。

羨門部は割石によって閉塞され，羨道部の天井石は調査時において，すでに除去されていたらしいことが図版５－２によって推知できるであろう。現在，この石堆の南端に2.15×0.7×0.5mの柱状の大石が突出しているが（図版１－２），これが第２図の梅原氏の略測図にみられる，羨門西側に横たわる大石にあたると思われるとともに，元来羨道部の天井石の一部であったと推定されよう。一方図版４－２や図版５－１にみられるように，奥壁に接して長方形の塼石が発見され，特に図版５－１では塼石が面状に敷き並べられていたような感さえある。このことは双床塚の場合と同じく，[29] 一種の棺台が構築されていたことを想像するに十分であろう。

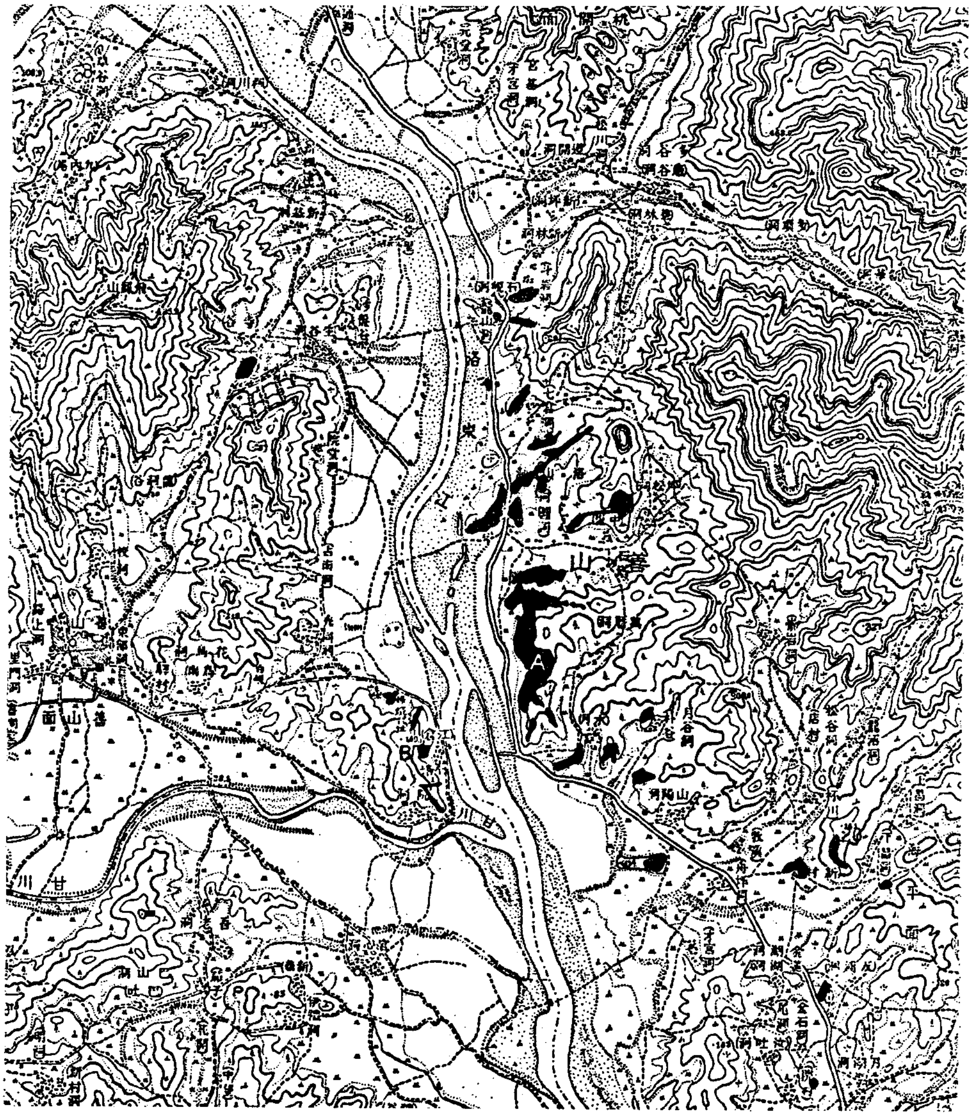
以上のような構造の本墳は，その内部主体としての石室の型式的分析から，馬塚・双床塚をはじめ忠孝洞の諸古墳とならんで７世紀前半から中葉にかけての標式的な石室墳であると結論される。

つぎに古墳の現状についてのべると，さきに触れた天井石や楣石を中心に南北に長い約10mの石堆状を呈し，これが古墳とは到底考えられないような状態である。しかし石堆の西壁に観察される天井石直下の列石や楣石下の石積（図版２－１）は，原位置での壁体の一部とみられるものであり，この石堆下および現地表面下には梅原氏の調査時に検出された遺構が，ほぼそのままに近い状態で埋没しているものと考えられる。いずれにせよ慶州古墳としては数少ない石室墳のひとつとして，その所在地が1974年の踏査によって確認されたことは，今後の慶州石室墳の研究にとって重要な意味をもつことになろう。

3.　善 山 古 墳 群

善山古墳群は洛東江西岸の善山面生谷洞・院洞をはじめ，東岸の桃開面・海平面の洛東江にのぞむ山腹丘陵面の約千数百基の古墳を包摂する一大古墳群であって，洛東江東岸地区におけるその分布範囲は，南北に約６kmの帯状を呈している（第３図，図版６－１）。

1915年（大正４年），黒板勝美氏が「史蹟研究」の目的をもって善山に滞留，海平面洛山洞の一古墳を発掘したのが，善山古墳の最初の調査[30]であろう。つづいて1917年（大正６年）には，今西龍氏がこの大規模な古墳群の略分布図を作成し，あわせて洛山洞第28号墳の発掘調査を行っている[31]。この調査結果は，個々の古墳について当時の状況を記した単なる分布調査の域を出ないものとはいえ，今日，相当数の古墳が滅失し，かつ今なお急激に



第3図　善山古墳群　約1：80,000（今西龍氏による）　　A：洛山洞地区　B：院洞地区

消滅しつつあるだけに，今後の善山古墳研究にとってきわめて貴重な資料となるであろう。

筆者は1974年および1975年の春，調査補助員，本学大学院研究科生　松村冬樹君とともに洛山洞地区の古墳群の一部と禿同洞・院洞地区の古墳群の一部を見学踏査した。その結果と所見はつぎのとおりである。

a.　洛山洞地区の踏査（1974年）

洛東江東岸の善山古墳群の現況について一瞥を得るため，洛山洞月波亭山地区の古墳群（標高約70m）をそのモデルケースとして，この地域の古墳をはじめて踏査したのは1974年の春である。

今西龍氏の調査によると，この月波亭山地区には約70余基の小型円墳があり，そのうち

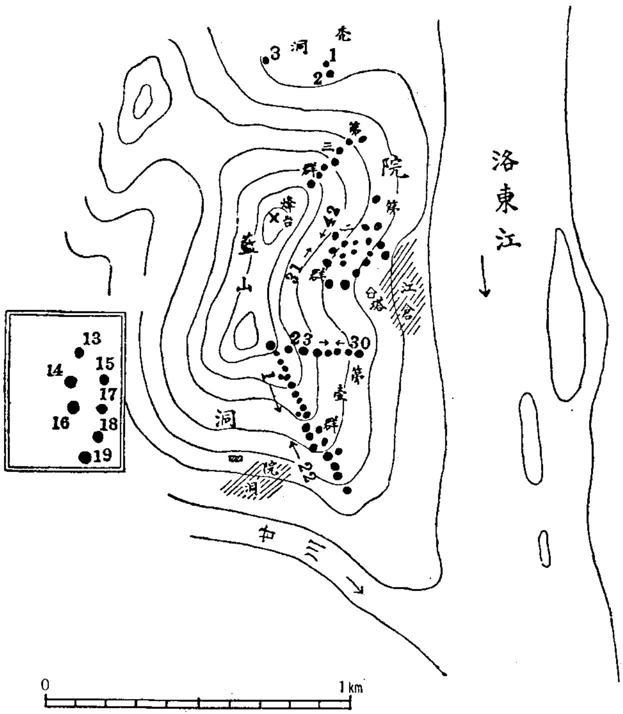
約25基については，天井石や石室が露出し，その一部の古墳は石室内に入ってその構造や石積の状態などが観察できたといわれる[32]。今や月波亭山上に立って見渡すと，比較的大型の円墳こそ注意にのぼるが，他の多くはほとんど消失したらしく，その分布密度は今西氏の調査時とくらべて，はるかに稀薄になっている。しかも残存する古墳もその頂部に大きな盗掘口をあけ，無惨な姿をさらしているものが多い（図版6－3）。そして必らずといってよいほどこのような盗掘口の周辺では硬質土器が散乱しているが（図版6－5），それらはほとんどが6世紀以後の硬質土器に属するものであった。また元は石室の壁体をなしたと思われる集石群があちこちに散乱する。そのうちのあるものは村人によって山下に搬出され，建築用石材や道路の敷石として用いられているらしいが，善山古墳群についての正当な評価が，考古学・歴史学の立場から将来なされなければならないだけに，このような現実は今後早急に改められることが望まれよう。

尚州街道をはさんで，この月波亭山地区の東には鄭臺山古墳群がある。この地域も月波亭山と同じく標高約70m前後の低山地性の地形である。今西龍氏が調査した1917年頃には，まだこの山腹面に約60基の古墳が確認されたが，現今では広範囲にわたって開拓がすすみ，大部分の古墳が消滅したものと思われる（図版6－2・4）。

なおこれらの洛山洞古墳群については，後日善山面院洞地区古墳群の踏査が完了しだい，より詳細に踏査することができればと思っている。

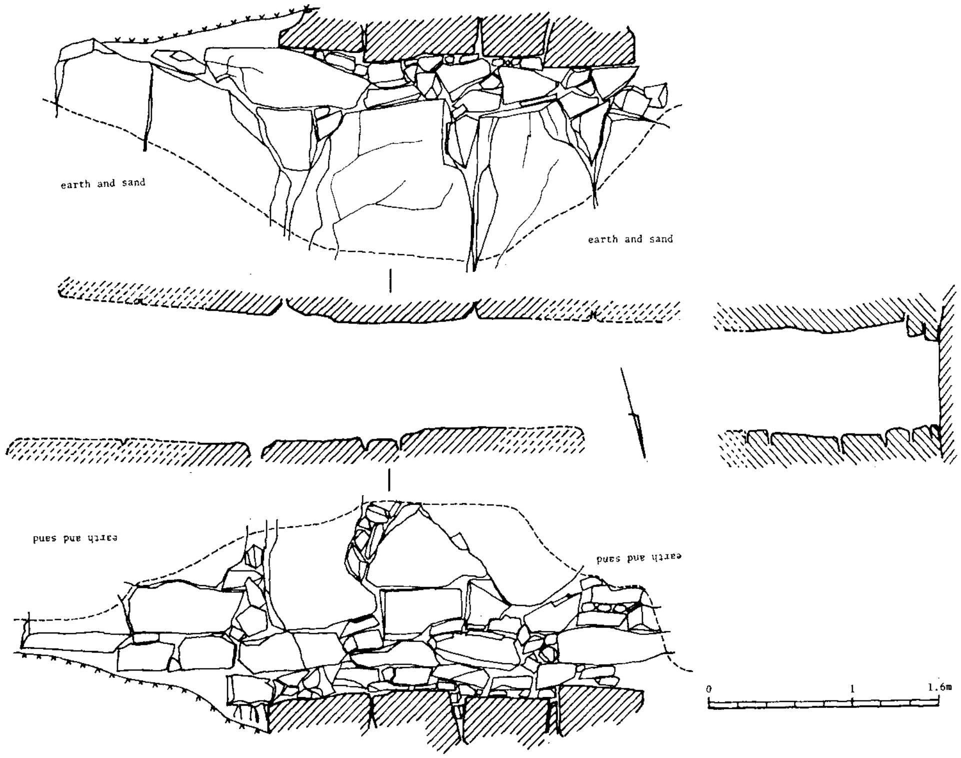
b. 禿同洞地区の踏査（1975年）

善山邑から駅村の丘陵を越え約1時間も東へ歩くと，漸く洛東江の流れが視野にとびこんでくる。ここは通称藍山とよばれる瓢形の山の北端にあり，ここから禿同洞の部落に通ずる小径を山手へ少し登った緩やかな北斜面に古墳群がある（図版7－1）。今西龍氏の調査では，この地区で計3基の古墳が確認されている（第4図）。今西氏の1・2号墳は，氏が残された記録[33]の内容（封土，石室の大きさ，石室の方位など）から，部落



第4図　善山禿同洞・院洞古墳群（今西龍氏による）

の裏に大きく開析する谷に沿って約 200m登った北斜面に今日なお所在する２基に同定してまず間違いない。部落から登りつめて初めてたどりつくのが今西氏の第１号墳であり，第２号墳は第１号墳の西23mのところにある。植生は目通り直径10〜15cm内外の松林である。第２号墳の北側墳裾に接して巾10m，深さ10m余の大きな谷が開析され，今にも墳丘が浸蝕されんばかりである。このあたりの土壌は浸蝕のうけやすい花崗岩の風化土からなっているため，両墳とも近い将来には潰滅の運命にさらされることになろう。



第５図　善山禿同洞第１号墳

第１号墳（第５図，図版８—１・３）は直径10m，高さ２m（墳丘北側）の円墳である。ほぼ長方形に近い石室の両端部には多量の土砂が流入し，その部分の石積が確認されないため，正確な石室の長さはわからない。しかし露出する側壁の石積から長さ５m，西端部の巾約 0.8m，東端部巾 1.2mのやや東に広がった長方形のプランをもつ石室であることが推定され，石室高は中央で約 1.5mである。石室の長軸は，ほぼ東南東—西北西線に一致する。石室の東端部巾が他端よりも広いから東部が入口，西部が奥壁にあたり，おそらく東壁を遺体搬入後に閉塞した，いわゆる横口式古墳であると考えてよいであろう。

壁体の下部には花崗岩の巨石が配置され，南壁には４個の巨石，北壁には判明するものだけでも３個の巨石が用いられている。これは一般に伽倻式古墳と呼ばれる後期古墳によく見受けられるように，壁体の構築に塼状石を用いた古墳とは顕著な相異をしめしている。また側壁が内傾することなく，ほぼ垂直な面を構成し，天井を支える小型の割石が２・３枚内側に持送られているのは，百済式古墳にみられる特徴[34]として注目されよう。天井石は

石室の中央部にある５枚のほかは除去されている。これらを被覆する封土は，頂部でも天井石上約 0.2〜0.3ｍの厚さで きわめて薄い。土砂の流出によってある程度高さが低められたとはいえ，石室の規模に比して封土の小さい古墳である。なかでも注目すべきは，封土に比較的高い密度で混ずる直径 0.2ｍ前後の角礫である。このような角礫が平均的に封土全体に含まれているらしいことは，後述する石堆群との関連において，やはり意図的なものとして理解してよいと思う。

第２号墳（図版８－４）は，第１号墳と同じく直径10ｍ，高さ 2.5ｍ（墳丘北側）の円墳である。西端部の天井石が除去され，石室の一部が露出するが，石室内には土砂が充満して詳細不明である。天井石が２枚露出する。石室の長軸は，ほぼ東南―北西線に一致する。露出する積石状態から推知するところ，壁体の構架方法，石室の大きさなど第１号墳のそれと類似するようである。なおこの墳裾に多数の硬質土器の破片が散布していた（図版８－２）。大きさのわりには薄手で，かつきわめて軽い後期的な土器片であるが，この遺物と第２号墳との関係は不明である。

今西氏が調査した**第３号墳**は第１・２号墳の西方約 160ｍの地点にあり，高さ約 1.7ｍの封土中に２個の石室が遺存したことになっているが，[35] 1974・75年の二度の踏査によってもなおこれを確認することができなかった。今西氏が1917年調査した当時，すでに荒廃していた古墳であるので，現在完全に消失した可能性がつよい。

第１号墳の北東数10ｍほど斜面を降ったところに一軒民家があり，さらにこれより東へ約4.50ｍ行った松林の中に直径８ｍ，高さ２ｍの円墳が１基ある。これが**第４号墳**（図版７－２）である。封土の中央には，深さ 0.3〜0.5ｍの ほぼ長方形の落こみがあり，これは明らかに石室の陥没部分である。封土の東麓の一部が深さ15ｍ前後の大きな谷の解析によって崩壊しており，さきの陥没部分にあたるところに石室の奥壁と思われる石積の一部が露出している。この陥没状態から石室はほぼ東西に長く構築されたものと推定される。西麓には天井石と思われる長さ 0.7〜１ｍの転石が３個あることから，この古墳はすでに天井部から盗掘がなされているものと考えられる。なお，この古墳について注目すべきは，第１号墳にもみられたように，封土中にかなりの密度で拳大の礫が混じていることである。これはつぎにのべる石堆群との関連においても無視できない所見であり，場合によっては昨年10月発掘された慶北漆谷郡漆谷面鳩岩洞第56号墳[36]（石槨積石古墳）に類する構造の古墳である可能性がつよいかもしれない。

第４号墳の西方約20ｍのところ，すなわち第４号墳と前述の民家との中央辺に約10ｍの間隔をもって大小２つの石堆群が所在する。大形を第１号，小形を第２号石堆と呼ぶことにする。

第１号石堆（図版９）は11×６ｍの長楕円形を呈し，径５～10cmの角礫が丘状に堆積している（図版９－４）。そしてこの周縁には長さ0.8〜1.2ｍの板状あるいは塊状をなす巨石が転在している（図版９－２）。岩質はすべて花崗岩である。またこれらの巨石のうち，

板状のもののひとつ（図版9－3）には，人工的に切出したと思われる切痕が認められるようである。このような石堆のあり方は，あるいは石槨積石古墳の存在したことに対する積極的な示唆になりうるのではないかと思う。

第2号石堆は第1号石堆の東北10mの位置にある。径5m前後の円墳状をなして角礫が堆積している。これには石室の壁体を構成したと思われる巨石の類は見当らないが，これが単なる石の集積であるとは思われない。角礫の大きさ，岩質は第1号石堆のそれと同じである。

c. 院洞二区（旧江倉部落）地域の踏査（1975年）

禿同洞部落から洛東江岸に出て，そこから川沿いに南に大きく回りこむと数軒の農家からなる院洞二区の部落にでる。ひと昔前は善山から大邱に出るための重要な渡船場として活気に満ちた部落（江倉，第4図参照）であったが，ここから上流約6kmの新基洞に橋がかかってからは往来が少なくなるとともに離村者もでて，部落は衰退の一途をたどった。

今西氏の調査によると，1917年当時はこの地区で約32基の古墳が確認できたというが，(37)現在するのは8基にすぎない。ここには大小さまざまな谷が幾筋も洛東江に向けて解析しており，ここに所在した古墳の大部分が自然の地形変化によって消失したものらしい。したがって今西氏の調査墳と現存するそれとを同定することが，ほとんど不可能であるので，ここでは踏査順に新しく付番して，その現況を報告することにする。

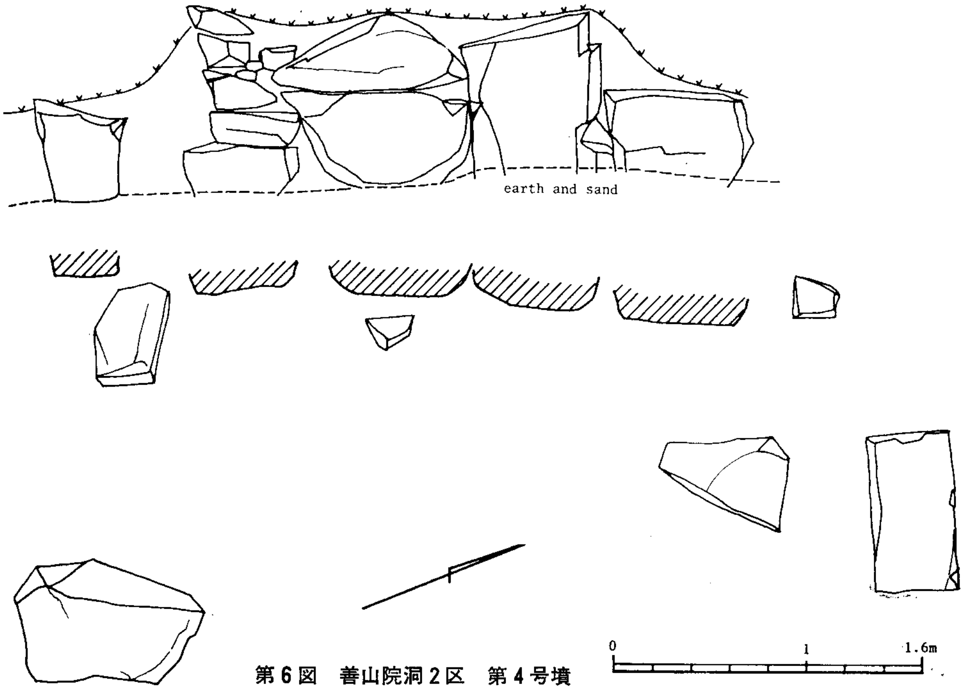
古墳群の所在するところは，洛東江に面する東の緩傾斜面で，標高は60～80mである。古墳がのる山地は禿同洞地区と同じく，花崗岩の風化土よりなっているため，風水による浸蝕をうけやすく，これが多数の古墳が消失した直接の原因であると思われる。植生は主に松とアカシアで，かなり密である。

禿同洞部落から洛東江ぞいの小径をしばらく南下すると，2・3軒の農家が初めて視界に入ってくる。ここが院洞二区の部落である。部落にとりつくと，すぐその右側に小さな石碑が立っている。その横を通り抜けて20mほど山手にのぼったところに**第1号墳**（図版10－1）がある。直径8m，高さ2mの円墳で，その中央部には東西に長い長方形の落こみが認められる。その陥没部の西端に0.5×0.3×0.3m大の山石2個が転在している。おそらくこれは壁体の一部であろう。

第2号墳は第1号墳の東に接して所在する円墳（径約5m）であるが，封土の東半部は現代墓のため削平され，壁体の一部をなしたと思われる山石が露呈している。

第1号墳の西約30mのところに**第3号墳**がある。直径10m，高さ2mの円墳である。この地域に分布する古墳としては規模も比較的大きく，墳丘もよく残っていることから，これは古墳というより自然地形とみた方がよいかもしれない。

第3号墳の西約30mの松林中に**第4号墳**（第6図，図版10－2）がある。その位置からみて今西氏の第33号墳に同定してよいかと思われる。封土はほとんど消失し，北北東一南



第6図　善山院洞2区　第4号墳

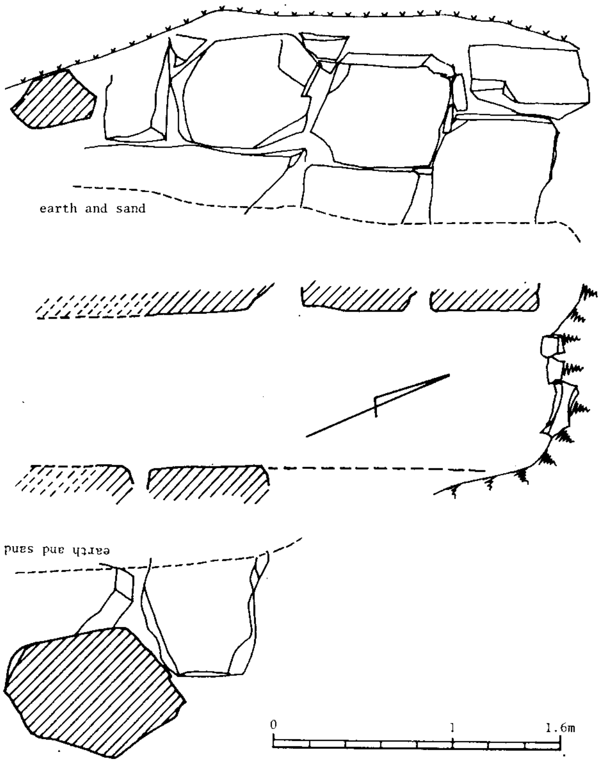
南西に位置する石室の西壁が，約2ｍにわたって残っているだけである。他に4個の山石が転在するのみで，天井石をはじめ他の壁体部分の石材はすべて持去られている。残存する西壁の壁面は垂直で，長さ1ｍ前後の，かなり大きな巨石が用いられており，塼状石を持送状に積上げた伽倻式古墳とは，いささか様相を異にしている。

第4号墳の北8ｍのところに，ほぼ9分どおり崩壊した古墳がある。これが **第5号墳**（図版11—1）で，今西氏の第39号墳に相当する古墳ではないかと思われる。石室は西南—北東に位置しており，その西南端には，1× 0.8×0.6m（高さ）の塊状の巨石がある。この石の北面は垂直な平担面をなし，奥壁を構成していたものと思われる。この西には同じく長さ1ｍ余の巨石が接して直角のコーナーを作っており，奥壁をなしたと思われる巨石の巾から石室巾は，およそ 0.8m内外と推定される。この奥壁石の手前 0.8mのところには，1枚の天井石（1.2×0.6×0.3m）が，またその南東2ｍのところには，1.2×0.45×0.4m（厚さ）の巨石1個（天井石？）が転在している。

第6号墳（図版11—2）は第5号墳の北西約10mのところにあり，その位置と地形から類推して，今西氏の第38号墳に同定されるものと思われる。封土は完全に消失し，壁体をなした巨石が数個転在するのみである。奥壁石と西壁の3個の石が，ほぼ原位置にあると思われる。したがって南南西—北北東に位置する巾約 0.8〜1ｍ前後の石室が構築されていたことが推知される。西壁の一部を構成していたひとつの石材は，0.8 × 0.8 × 0.5m（高さ）を，また奥壁石は，0.9 × 0.4 × 0.8m（高さ）をはかる大石であり，この古墳においてもかなりの巨石が壁体の石材として用いられていたことを知る。西壁の一部をなした

と思われる巨石の東方 1.5mには，巾 1.4m，厚さ 0.4m（奥行は土砂のため不明だが，少なくとも 0.8mはある）の巨石があるが，その形状からおそらく天井石であろうと思われる。

この第６号墳の西約10mには，巾約10m，深さ約10mの大きな谷が解析している。**第７号墳**（第７図，図版11－３）は，この対岸の崖縁にあり，封土はおろか石室の約３分の２は，この谷の浸蝕活動によってすでに消失している。第６号墳の南西約35～40mの地点である。巾約１m(長さ不明)の石室が，第６号墳の方位と同じく南南西－北北東に位置する。東壁には２個の巨石が残っているのみであるが，西壁は比較的よく遺存し，部分的には天井石直下の側石まで原位置を保っているものと考えられる。南端部には， 2.5 ×１× 0.8m（厚さ）の天井石一枚が構架されたまま残っている。現存する西壁を構成する石は７個を数え，長さ 0.6～1.2m，高さも 0.6mをはかるものがほとんどで，壁体を構成するのに巨石を用いている点は，これまでの古墳に共通する特徴として注意を要する。もちろん壁面は垂直に構成されている。位置関係から推測して，同墳は今西氏の第42号墳に相当する古墳ではないかと思われる。



第７図　善山院洞２区　第７号墳

以上の踏査の結果，今西氏の調査による第31～37号，および第40・41号墳をはじめとする，およそ20基の古墳は，谷の解析が急速に進行したため，過去数十年の間に完全に滅失したものと考えられよう。

4. 小　　結

竪穴式・横穴式・横口式の型式何如をとわず，慶州地方の高塚式石室墳は，百済地方および洛東江流域と比べて，はるかに遅れて出現している。現在知られている限りでは，味鄒王陵地区第５区域第17号墳や，慶州 151号墳などが慶州地方の古式石室墳にかぞえられ，ほぼ６世紀の初葉から中葉に位置づけられる古墳である。なかでも慶州 151号墳は横口式

の石室墳であり，洛東江流域の伽倻墓制が積石木槨墳を伝統とする新羅墓制に受け入れられた事情をよく物語るものである。おそらく新羅社会に仏教が伝流定着したか，あるいは洛東江流域の在野勢力が慶州の門閥貴族社会に浸透同化したことが，その歴史的背景となっているものと思われる。

新羅終末期古墳として特徴的な，穹窿状天井に羨道施設をもった石室墳である慶州路西洞 131・ 133・ 137号墳についても，慶州古墳群内の占地の特異な様態から，さきの慶州151号墳の場合に似た歴史的背景が考えられる。

太宗武烈王陵もおそらくこれらと同じ構造の石室墳であると推定される。そしてこの古墳は，慶州古墳群という伝統的な王陵墓域の外に築成され，かつ石室がその内部主体として採用された最初の王陵であると思われる。これには武烈王の骨品が最高の聖骨でなく，1ランク低い真骨位であったという身分上の理由が，直接の原因であったと推測されよう。

武烈王陵において，その存在が推定され，かつ伝神徳王陵において確認されたように，玄室のプランがほぼ正方形で，穹窿状天井と羨道施設をもつ横穴式石室墳が，7世紀の前半から新羅の半島統一期にかけて，新羅王陵の墳墓形式として漸時定形化してくることは，特に注目に価する。そして特に造墓行為が許された，在野の貴族や高官の墳墓にも，さきの新羅王陵の墳墓形式が踏襲されていくらしく，ここに新羅専制王権が確立されていく経緯を，われわれは読みとることができるかもしれない。

今回その踏査の結果を報告した善山禿同洞および院洞二区（旧江倉部落）に所在する古墳は，善山古墳群のなかでも古い古墳に属し（5世紀末から6世紀代），挾長なプランの玄室，小形の割石を乱積する石室，それに強く内傾する側壁といった特徴をもつ伽倻式古墳とは構造的に異っている。むしろ大邱達城古墳群のそれと類型的であると言えよう。この両古墳群においては，私が踏査の目的にすえてきた穹窿状天井と羨道施設のある特殊な古墳は見出すことができなかった。これはこれらの古墳群が善山古墳としては古式である第3期古墳を中心として成立っていることを考えれば，当然のことであるかもしれない。

この特殊な墳墓形式に7世紀前葉から新羅統一期にかけての新羅王権確立の経緯が投影されているものとする私の仮設によれば，善山地方の新羅統一期頃の古墳群には，かかる形式の古墳が存在しなければならない。このような視座から，さしあたり今西氏の院洞第1群（第4図参照）の踏査を，またひきつづき洛東江右岸の各古墳群の踏査を鋭意つづけたいと考えている。

おわりに，慶州路西洞 131号墳および善山院洞地区の古墳踏査にあたっては，元慶州国立博物館長　故朴日薫氏，嶺南大学　李殷昌氏，および善山の金元国氏には多大なご指導を賜わり，また梅原考古資料の調査では，東洋文庫の渡辺兼庸氏のご好意にあまえるところが多かったことを記して感謝の意としたい。

なおここに掲げた内容は，南山大学（名古屋）昭和48・49年度特別研究費によって行われた研究の成果である。

注

(1) ここで言う慶州古墳とは，かつて邑南古墳群とも呼ばれた慶州市路西・路東・皇南・皇吾・仁旺の各洞に所在する古墳の総称である。

(2) 慶州古墳（注1参照）を含めて慶州市内外に所在する古墳を総称する場合は，「慶州地方の古墳」という用語を用いる。

(3) 内槨としての積石木槨をもつ高塚古墳は，慶州古墳群のほか普門洞（慶州市）・芳内里（月城郡）・金尺里（月城郡）などの慶州市に近接する各古墳群に多数分布している。ただし洛東江中流域の昌寧校洞12号墳は，積石木槨墳の分布地域からやや離れて存在する唯一の例外である。芳内里古墳群：伊藤秋男　1971，注16。昌寧校洞12号墳：穴沢咊光・馬目順一　1975，53頁。

(4) Akio Ito 1971。伊藤秋男　1972，57—73頁。なお筆者の古墳編年案は次のとおりである。

第1期（A期）： 4世紀後半— 450年頃

第2期（B期）： 450年頃— 520年頃

第3期（C期）： 520年頃— 600年頃

第4期（D期）： 600年頃—7世紀後半頃

(5) 伊藤秋男　1973，368頁。

(6) 133号（馬塚）・137号墳（双床塚）：金載元・金元龍　1955，3—26頁。145—1号墳（皇南里破壊墳）：朴日薫　1964。151号墳：朴日薫　1969。皇吾洞 102—34番地古墳：朴日薫　1971。131号墳：有光教一　1955，46・47頁。味鄒王陵A・C地区古墳：李殷昌　1974，49頁。金宅圭・李殷昌　1975，44・45頁，101— 110頁。味鄒王陵第5区域古墳：金廷鶴・鄭澄元　1975。

(7) 小泉顕夫　1969。

(8) 未発表ながら鶏林路の改修工事の時，多数の石槨墳が検出されている。『ソウル新聞』1973年7月13日，『中央日報』1973年7月13日。なおこの調査成果は，文化財管理局・慶州史蹟管理事務所から近日刊行の予定と聞く。

(9) 野守健・神田惣蔵　1935。

(10) 盗掘されていたため副葬品は少いが，第1号墳発見の唐草文の透しがある銙帯金具が，年代判定のための唯一の資料である。これは慶州金冠塚や瑞鳳塚出土のそれと同型式であることを根拠に，第1号墳の年代は，ほぼ5世紀末葉に求められよう。百済熊津時代の初期に属し，この形式の古墳は，この公州地方では古式古墳のひとつと考えられる。

(11) 池山洞3号墳：浜田耕作・梅原末治　1922，39—42頁。五倫台9・10号墳：金廷鶴・鄭澄元　1973，19—25頁。

(12) 上柏里古墳：金東鎬　1972。達西50号墳第2槨：小泉顕夫・野守健　1931，47—52頁。

(13) 全吉姫　1961，54頁。

(14) 151号墳については，伊藤秋男　1973，特に 359— 364頁。

(15) これまで報告された資料による限り，すべて第3期に属する古墳である。なかでも竪穴式の味鄒王陵地区第5区域17号墳は，路西洞 138号墳の積石木槨墳の時期に平行し，第3期の早い段階に位置づけられよう。これに関連して特に注意を要するのは，これらの多数の石室墳に近接して検出された積石木槨墳も例外なく第3期に属し，石室墳と前後して築成されていることである。そしてこれらの古墳が，皇南洞地区の南に偏って占地していることを考えると，このような新しいタイプの小古墳が6世紀に入った頃から新しい墓域を形成したことが推知されよう。またこのような現象は，当然のことながら古墳の被葬者階級の底辺が拡大したことと無関係ではないと思われる。

(16) 朝鮮総督府　1916，図1125—1169。

(17) 伊藤秋男　1973，361— 364頁。

(18) 元慶州博物館長　朴日薫氏の教示による。

(19) 三品彰英　1963，192— 197頁。

(20) 朝鮮総督府　1917，図1674。

(21) 朴日薫　1963。

(22) 可楽洞3号（ソウル大学）・4号・5号（梨花女子大学）・6号墳（檀国大学）や芳荑洞1号墳（文化財管理局）などが，この形式の古墳に属する。蚕室地区遺跡発掘調査団1975，図版5・36・43・55など。

(23) 宋山里1・2・5号墳がこの形式の古墳に属する。野守健・神田惣蔵　1935，図版5・13。

(24) 金英夏・尹容鎮　1966，図版44・45。

(25) 黒板勝美　1974，25頁。

(26) しかし慶北・尚州には，この種の古墳がかなり分布しているとも言われる。「古代を考える会」での北野耕平氏のご教示による。これについてはいずれ踏査したいと考えている。

(27) 有光教一　1955，46・47頁。

(28) 梅原考古資料　2690～2701・5732。東洋学術協会　1966，101・216頁。

(29) 金載元・金元龍　1955，図版9。

(30) 黒板勝美　1974，15・16頁。

(31) 今西龍　1920，108－125頁。

(32) 今西龍　1920，60・61頁。

(33) 今西龍　1920，40頁。

(34) 安承周　1972，図10・12。

(35) 今西龍　1920，40頁。

(36) 金元龍・金基雄・李殷昌・秦弘燮　1976，167・168頁の図，金宅圭・李殷昌　1976。

(37) 今西龍　1920，38頁。

引　用　文　献

安承周　1972：「公州地方の百済古墳」『百済の考古学』83－118頁。

穴沢咊光・馬目順一　1975：「昌寧校洞古墳群」『考古学雑誌』60－4。

有光教一　1955：「慶州邑南古墳群について」『朝鮮学報』8，33－49頁。

朴日薫　1963：「慶州三陵の石室墳－伝新羅神徳王陵－」『美術資料』8。（『朝鮮研究年報』7〔1965〕37－38頁に笠井倭人氏の抄訳がある）。

　　　1964：「皇南里破壊古墳発掘調査報告」『皇吾里4・5号古墳皇南里破壊古墳発掘調査報告』29－54頁。

　　　1969：「皇南里第151号墳」『慶州皇吾里第1・33号・皇南里第151号古墳発掘調査報告』115－145頁。

　　　1971：「積石槨古墳発掘調査」『考古美術』109，17－19頁。

朝鮮総督府　1916：『朝鮮古蹟図譜』3。

　　　1917：『朝鮮古蹟図譜』5。

浜田耕作・梅原末治　1922：「慶尚北道慶尚南道古蹟調査報告書」『大正7年度古蹟調査報告』（第1冊）（前半）

今西龍　1920：「慶尚北道善山郡，達城郡，高霊郡，星州郡，金泉郡，慶尚南道咸安郡，昌寧郡調査報告」『大正6年度古蹟調査報告』23－520頁。

ITO, Akio 1971 : Zur Chronologie der frühsillazeitlichen Gräber in Südkorea.

伊藤秋男　1971：「韓国古新羅時代古墳の研究史とその現況」『W. シュミット生誕100年記念論文集』

　　　1972：「耳飾の型式学的研究に基づく韓国古新羅時代古墳の編年に関する一試案」『朝鮮学報』64，15－73頁。

　　　1973：「韓国慶州古墳群における石室墳の編年について－慶州皇南洞第151号墳の研究－」

『古代文化』25—11, 355— 374頁。
小泉顕夫・野守健 1931：「慶尚北道達城郡達西面古墳調査報告」『大正12年度古蹟調査報告』（第1冊）。
小泉顕夫 1969：「新羅の土偶」『考古学ジャーナル』38, 2—3頁。
黒板勝美 1974：「朝鮮史蹟遺物調査復命書」『黒板勝美先生遺文』3— 138頁。
金英夏・尹容鎭 1966：「高霊古衙二洞古墳調査報告」『古墳発掘調査報告』49—55頁。
金元龍・金基雄・李殷昌・秦弘燮 1976：「新羅・伽倻古墳の諸問題—その発生と発展—」『韓国学報』2, 159— 187頁。
金載元・金元龍 1955：『慶州路西里双床塚・馬塚・ 138号墳調査報告』。
金宅圭・李殷昌 1975：『皇南洞古墳発掘調査概報』（『新羅伽倻文化』6・7・8合併輯にも所収)。
1976：『鳩岩洞古墳発掘調査概報』。
金廷鶴・鄭澄元 1973：『五倫台古墳群発掘報告書』。
1975：「味鄒王陵地区第5区域古墳群発掘調査報告」『慶州地区古墳発掘調査報告書』第1輯。
金東鎬 1972：『咸陽上柏里古墳発掘調査報告』。
李殷昌 1974：「慶州皇南洞味鄒王陵前地域古墳群発掘調査」『韓国考古学年報』1（1973年度）45—53頁。
三品彰英 1963：「骨品制社会」『古代史講座』7, 194— 209頁。
野守健・神田惣蔵 1935：「忠清南道公州宋山里古墳調査報告」『昭和2年度古蹟調査報告書』（第2冊）。
蚕室地区遺跡発掘調査団 1975：『蚕室地区遺跡発掘調査報告』（1975年度）。
東洋学術協会 1966：『梅原考古資料目録』（朝鮮之部）。
全吉姫 1961：「伽倻墓制の研究」『梨大史苑』3, 37—73頁。

（文学部人類学科助教授）

Bericht über die archäologischen Untersuchungen des Sounsan (善山) Gräberfeldes in Kyongsangbukdo (慶尚北道) Südkorea (1.Teil)

Die spezifischen Eigenschaften von steinernen Grabkammern mit Dromos im Kyongju (慶州) Gräberfeld

ITO Akio

Für die sillazeitlichen Gräber in Kyongju sind hölzerne Grabkammern charakteristisch, die mit Roll- und Feldsteinen bedeckt sind. Durch die in den letzten Jahren von den Koreanischen Archäologen energisch durchgeführten Ausgrabungen stellte sich fest, daß man neben den hölzernen Grabkammer eine Menge steinerne in die sillazeitlichen Grabhügel eingebaut hat. Die ausgegrabenen und publizierten Steinkammergräber zählen heute etwa 17. Sie lassen sich nach den Dachformen in folgenden Varianten unterglidern: 1) Grabkammern ohne Eingang mit flacher Decke, 2) Grabkammern ohne Eingang und Deckenplatten, 3) Grabkammern mit Eingang (aber nicht durch Dromos) und flacher Decke, 4) Grabkammern mit Dromos und flacher Decke, und 5) Grabkammern mit Dromos und falschem Gewölbe. Nach der Analyse der Grabfunde setzen sich diese steinernen Grabkammern im Kyongju Gräberfeld ausnahmslos nach der Mitte des 6. Jahrhunderts durch, während diese im mittleren und westlichen Gebiet der koreanischen Peninsula schon um 400 n. Chr. aufzuweisen sind.

Von den 17 Steinkammergräbern besitzen die Gräber 131, 133 und 137 von Kyongju in ihrem Hügel eine Grabkammer mit Dromos und falschem Gewölbe. Dieser Typ des Grabs ist der neueste in der Frühsillazeit und ist erst in der ersten Hälfte des 7. Jahrhunderts in der Kyongju Nekropole nachzuweisen. Sehr auffallend ist. daß diese Gräber am westlichen Rand des Nosodong (路西洞) Gebietes innerhalb des Kyongju Gräberfeldes angelegt wurden (Abb. 1). Für den Bau der Gräber könnte den Bestattenen irgend eine Einschränkung auferlegt worden sein, da sie sich in der gesellschaftlichen Stellung der Silla (新羅) -Dynastie von den angesehenen Kyongju-Adligen unterschieden haben. Sie wären vielleicht aus dem Kaya (伽倻) Gebiet gewesen, das in der ersten Hälfte des 6. Jahrhunderts von der Silla-Dynastie eingenommen wurde.

In Königgräber wurde in der Regel eine hölzerne Grabkammer eingebaut. Es ist aber mit größter Wahrscheinlichkeit anzunehmen, daß das Königgrab für Muyol (武烈王, 654—660), den 29. König der Silla-Dynastie, in dem Hügel eine steinerne Grabkammer mit Dromos und falschem Gewölbe erhielt, wie die

Gräber 131, 133 und 137. Das Königgrab ist wahrscheinlich das erste, in dem sich ein solcher Grabeinbau befindet. Das Grab liegt in Soakdong (西岳洞), mehrere Kilometer südwestlich von der Kyongju Stadt, und es ist das erste Königgrab, das außerhalb des Kyongju Gräberfeldes angelegt worden ist. Der grundsätzliche Wechsel in den Grabbauten und im Bauplatz des Grabs kann damit eng zusammenhängen, daß der König Muyol nicht zur legitimen Königfamilie der Silla-Dynastie gehörte.

Außerhalb der Kyongju Stadt lassen sich heute 17 Königgräber feststellen, die ohne Ausnahme nach der Muyol-Zeit datiert sind. Nach Ausgrabungen von mehreren Gräbern kann man annehmen, daß sie alle in ihrem Hügel eine Grabkammer mit Dromos und falschem Gewölbe besitzen. Diese Tatsache zeigt uns, daß der Typ dieses Grabs für Silla-Königgräber nach der zweiten Hälfte des 7. Jahrhunderts bestimmt worden wäre.

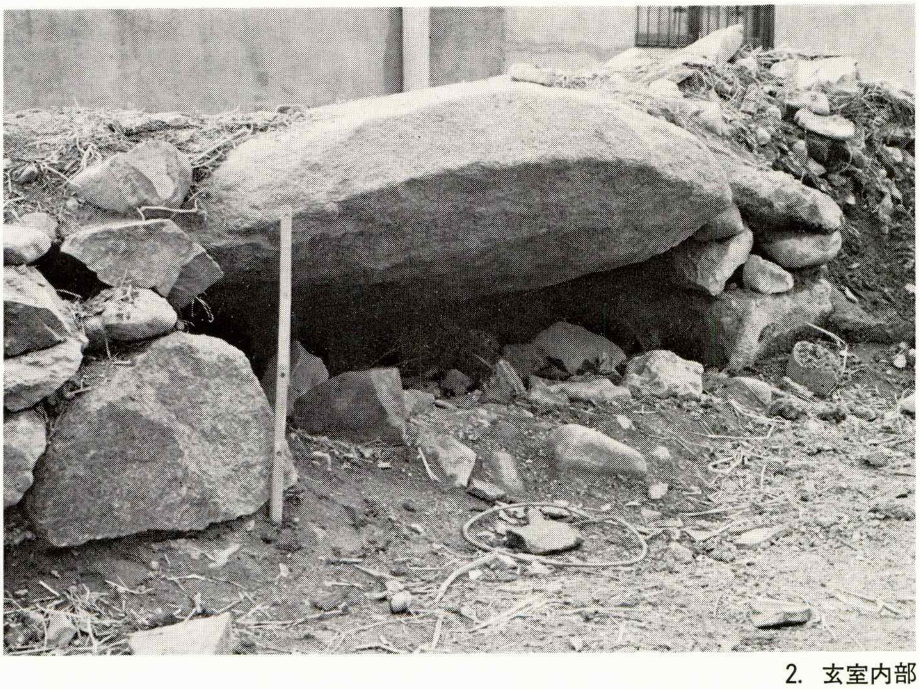
PL. I

図版一　慶州路西洞一三一号墳

1. 第133号墳々頂から望む

2. 羨道部の石堆

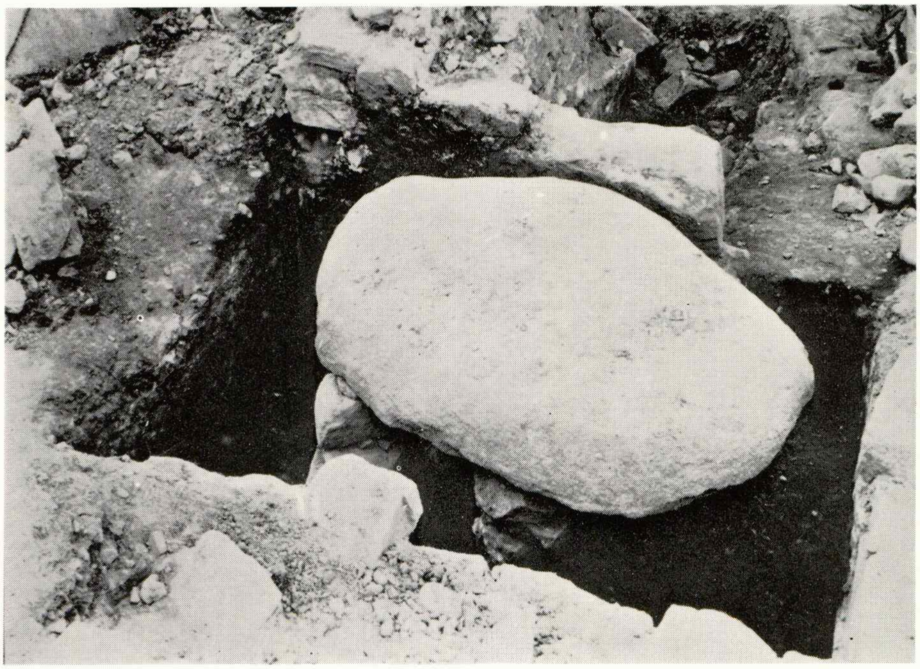
1. 西側側壁の積石部分



2. 玄室内部

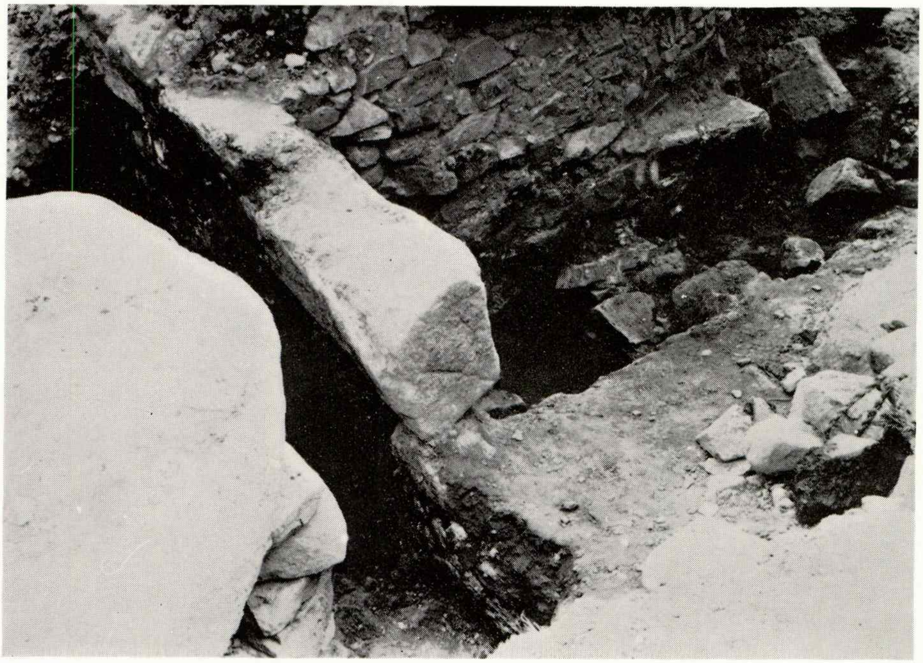
図版三　慶州路西洞第一三一号墳（昭和四年）

1. 第130号墳の西斜面から（梅原考古資料2695）

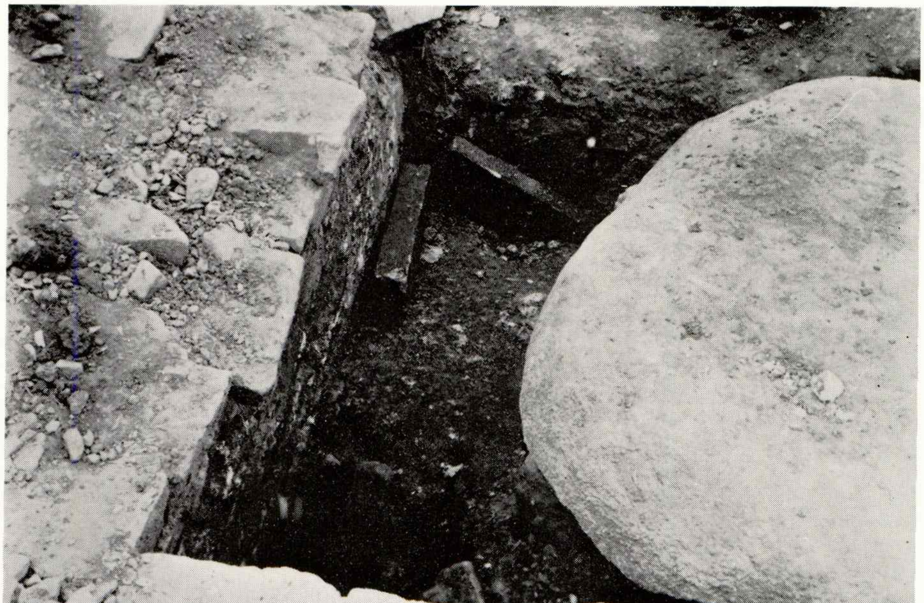


2. 北から見た玄室上部（梅原考古資料2700）

図版四　慶州路西洞第一三一号墳（昭和四年）



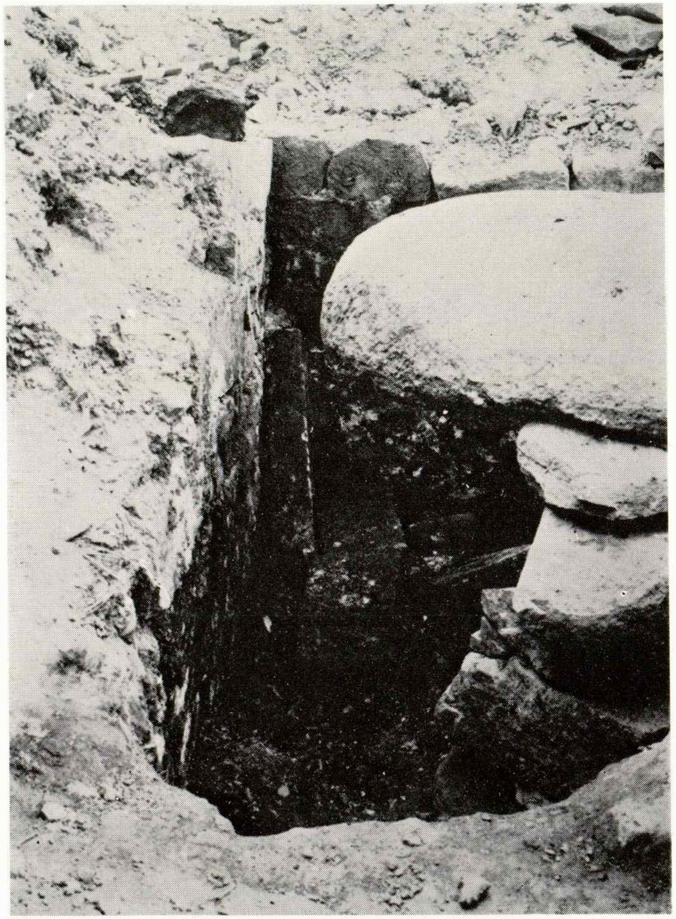
1. 上から見た羨道部分（梅原考古資料2701）



2. 玄室奥部（梅原考古資料2699）

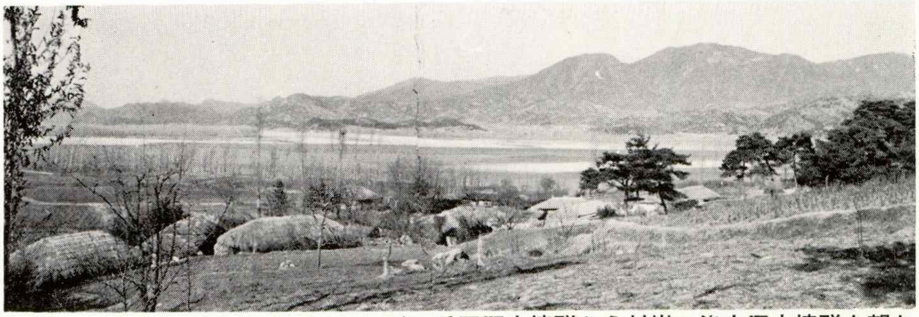
PL. Ⅴ

図版五　慶州路西洞第一三一号墳（昭和四年）

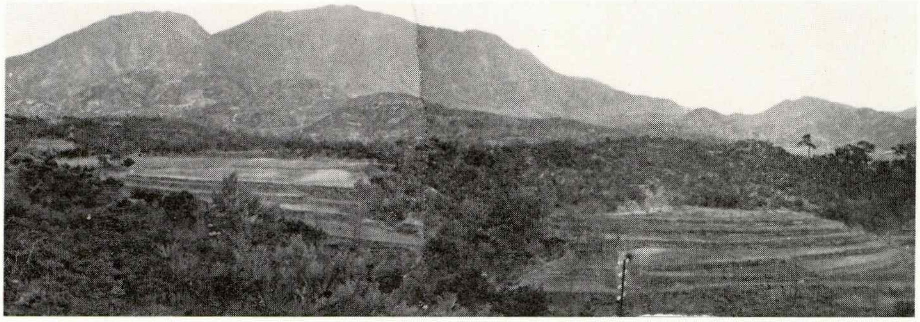


1. 玄室内西部の棺台（梅原考古資料2698）

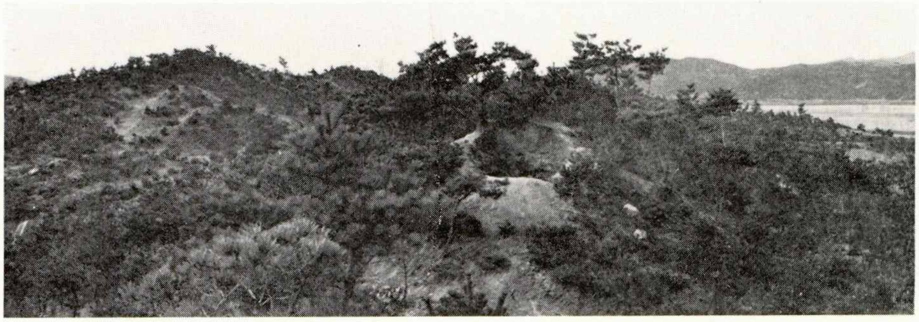
2. 羨門閉塞部分（梅原考古資料2697）



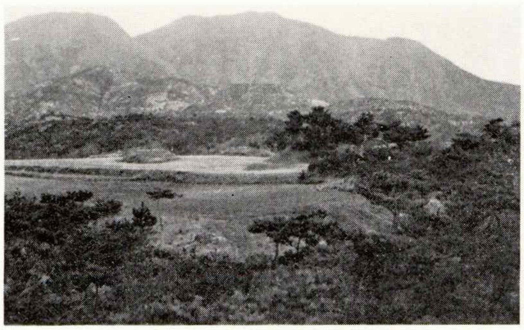
1. 禿同洞古墳群から対岸の洛山洞古墳群を望む



2. 月波亭山から望んだ鄭墓山古墳群の開拓状況



3. 月波亭山古墳群の古墳盗掘状況

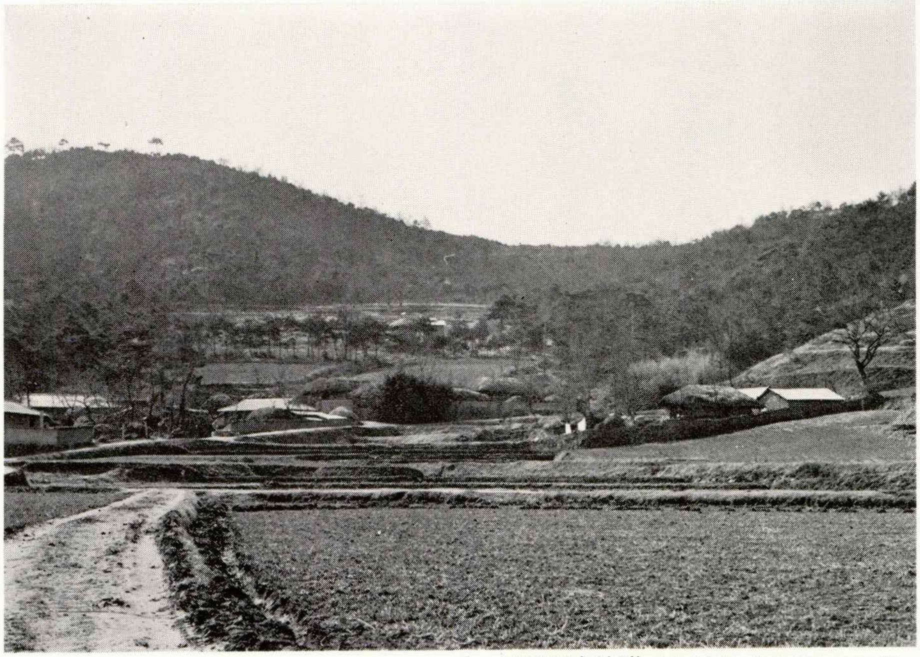


4. 鄭墓山古墳群の開拓状況

5. 月波亭山地区に散布する土器

PL. Ⅶ

図版七　善山・禿同洞古墳群



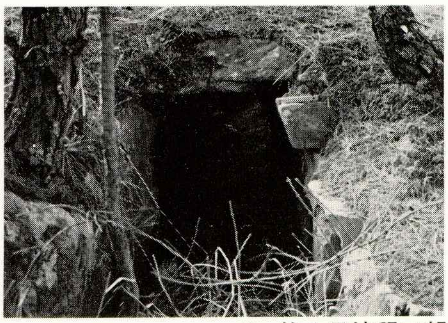
1. 禿同洞古墳群（中央平坦部から右の林中）

2. 第4号墳

図版八　善山・禿洞同古墳群

1. 第１号墳

2. 第２号墳々裾の土器

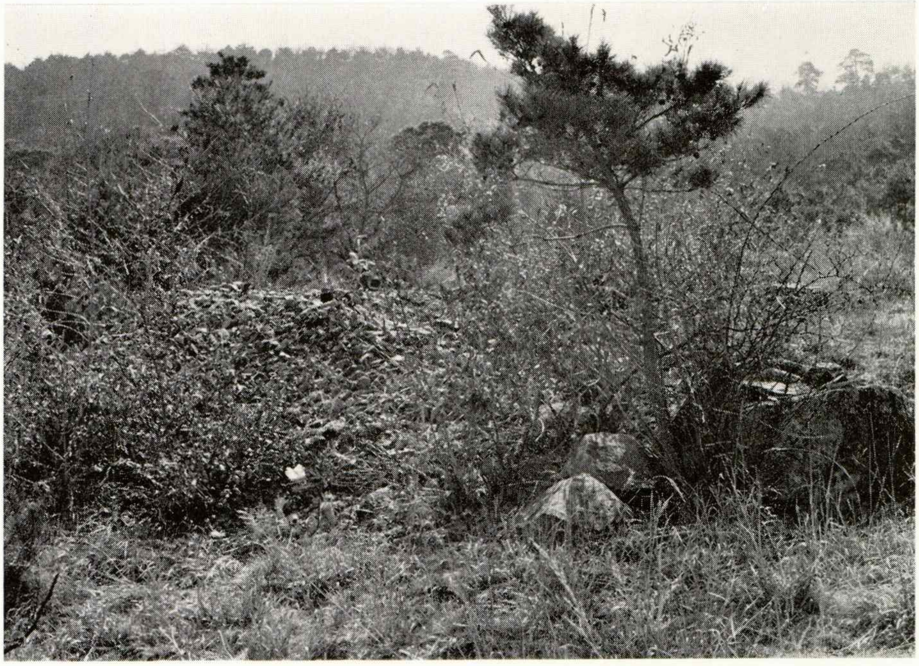


3. 第１号墳開口部

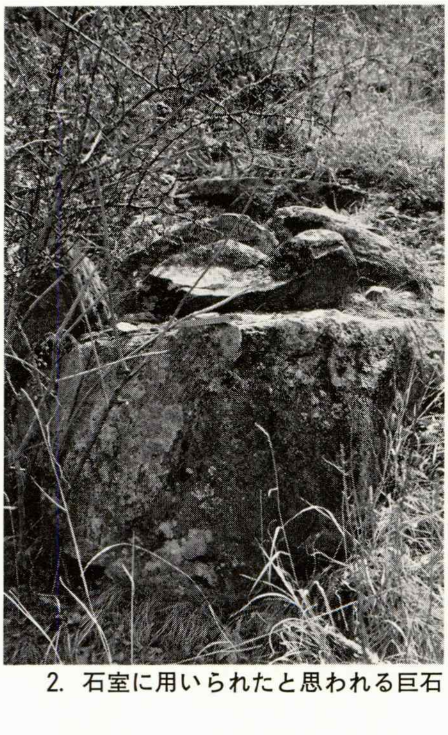
4. 第２号墳開口部

PL. Ⅸ

図版九　善山・禿同洞古墳群第一号石堆



1. 民家の前庭から石堆を望む

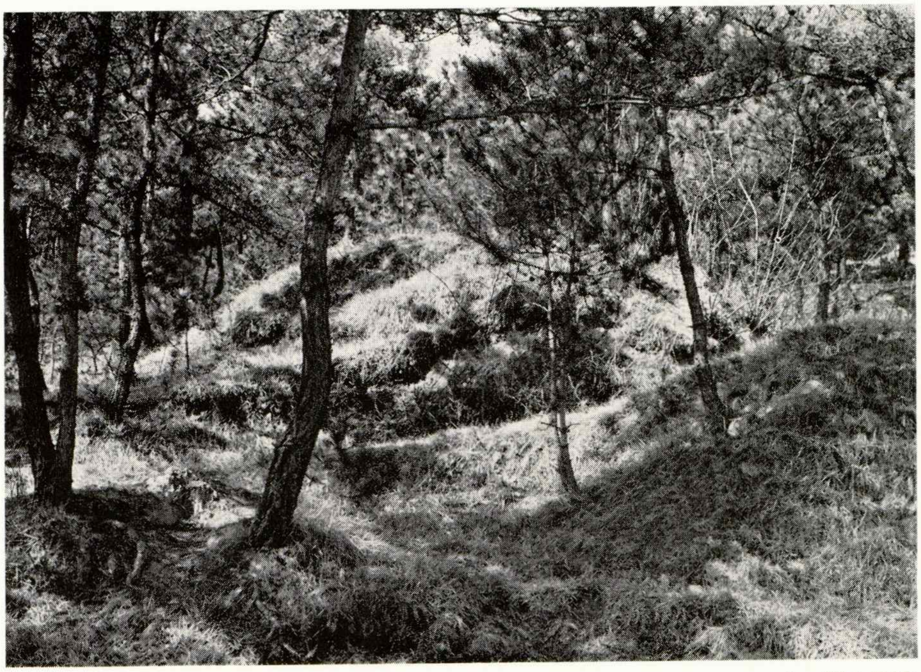


2. 石室に用いられたと思われる巨石

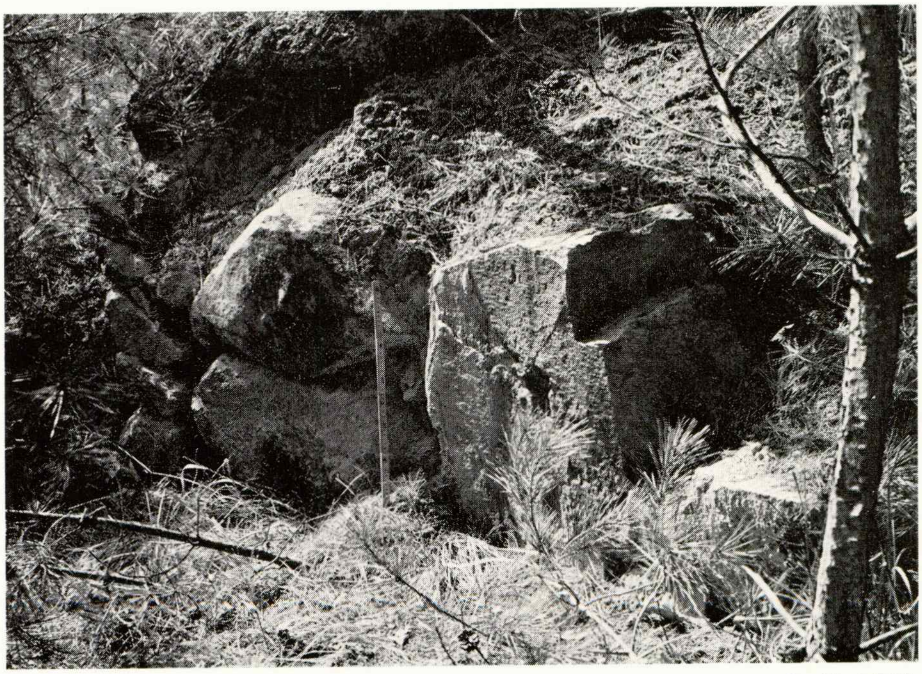
3. 切痕のある板状石

4. 石堆の礫

図版一〇 善山・院洞二区（旧江倉地区）古墳群

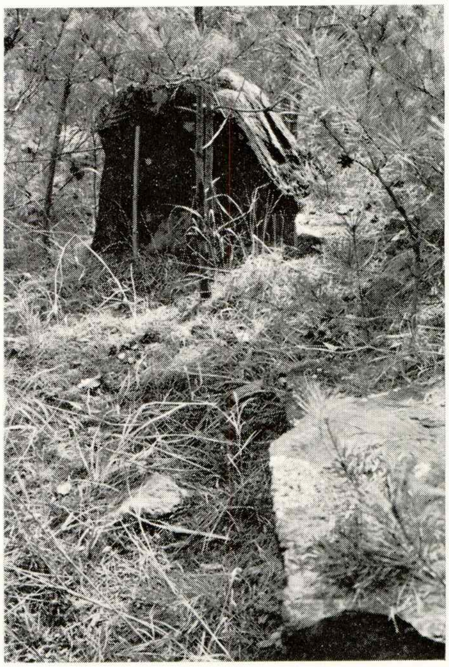


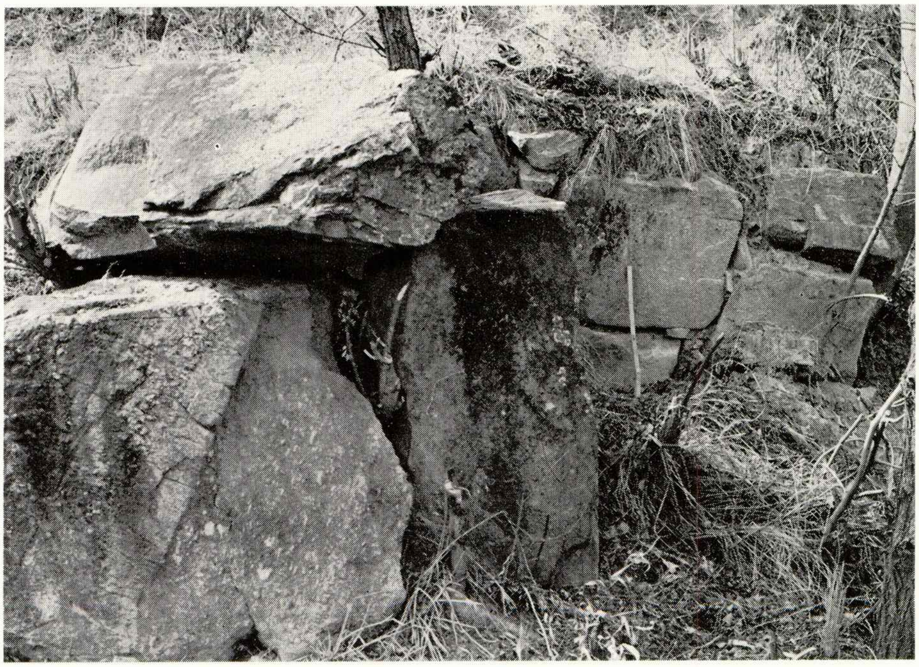
1. 第１号墳



2. 第４号墳

1. 第5号墳


2. 第6号墳


3. 第7号墳